

徴古館 第76回企画展

東京 侯爵鍋島家と



いあいさつ

佐賀藩主鍋島家は明治維新を機に大名から華族、そして侯爵となり、住まいも佐賀から東京へと移りました。

明治二十五年（一八九二）には専門家の設計による最古の洋風大邸宅といわれる鍋島邸西洋館が永田町に竣工し、明治天皇・皇后の行幸啓を仰ぎました。関東大震災以後は渋谷松涛に移りますが、海外経験を活かして社交界を牽引する一方、十一代鍋島直大^{なほひろ}公は明治天皇の側近として宮内省式部長官を務め、先祖を意識し続けるなど伝統を重んじた侯爵鍋島家の姿は、和魂洋才という近代国家建設の気風そのものと言えるでしょう。

今年、明治から二五〇年近く営まれた東京青山霊園内の鍋島家御墓所が東京都に返還され、佐賀・春日御墓所へ改葬されるにあたり、東京で侯爵家として歩んだ鍋島家の足跡を辿ります。

平成二十八年五月二十三日

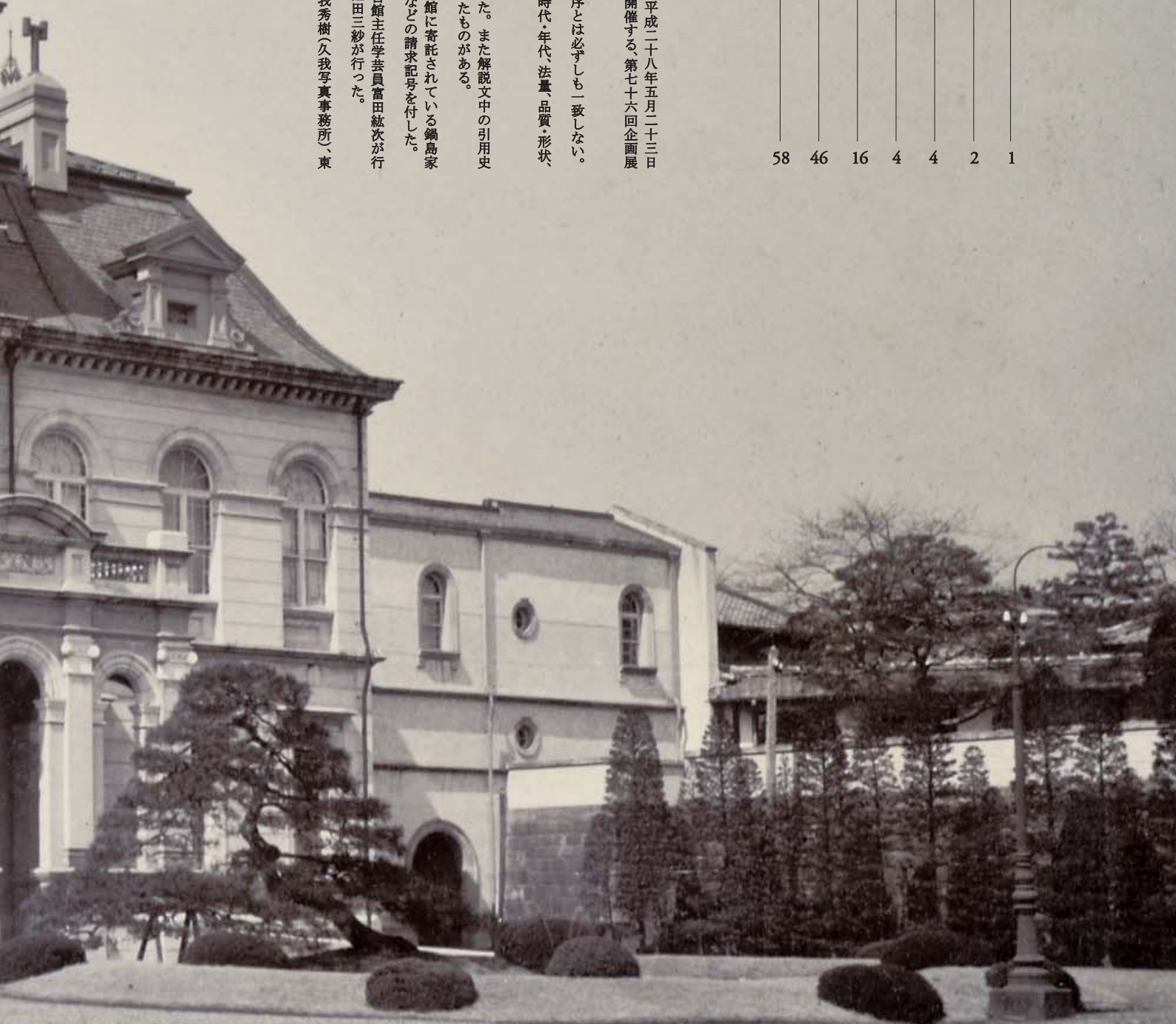
公益財団法人 鍋島報効会

目次

ごあいさつ	1
目次・凡例	2
図版・解説	4
◆ 第一章 鍋島直大の洋行	4
◆ 第二章 無双の侯爵鍋島家	16
◆ 第三章 侯爵家を継ぐ	46
出品リスト	58

凡例

- 一 この図録は、公益財団法人鍋島報効会が主催し、平成二十八年五月二十三日（月）から七月二十三日（土）まで徳古館において開催する、第七十六回企画展「侯爵鍋島家と東京」の解説付き目録である。
- 一 資料の順序は各テーマに従って配列し、陳列の順序とは必ずしも一致しない。
- 一 資料解説は、出品番号、名称、員数、作者・所有者、時代・年代、法量、品質・形状、所蔵者・解説の順に記した。
- 一 文書資料の一部には常用漢字による釈文を付した。また解説文中の引用史料は、適宜読み下し文にするなど解説の便を図ったものがある。
- 一 公益財団法人鍋島報効会が所蔵し佐賀県立図書館に寄託されている鍋島家文庫資料については、所蔵者欄に「鍋一〇九七」などの請求記号を付した。
- 一 執筆・編集・製作は公益財団法人鍋島報効会 徳古館主任学芸員富田絃次が行い、校正は徳古館副館長藤口悦子・富田・学芸員池田三紗が行った。
- 一 図版の写真撮影は富田が行ったほか、一部に久我秀樹（久我写真事務所）、東京大学史料編纂所撮影の写真等を用いた。





8 鍋島直大像

一面 百武兼行筆 明治十五年（一八八二）
 （額）縦一五四・五cm 横一〇七・〇cm
 （キャンバス）縦一三二・五cm 横八四・三cm
 画布油彩 額装
 公益財団法人鍋島報效会所蔵

画面右下に「紀元二千五百四十一年毎官暇敬写 特命全権公使従三位鍋島公真于羅馬府 紀元節 百武兼行謹誌」の年紀と署名がある。つまり本作は、外務書記官として随行した百武兼行（一八四二～八四）がローマで公務の合間を縫って描き、明治十五年（一八八二）二月十一日に完成させた特命全権公使鍋島直大の肖像画である。百武は公務のかたわら、王立ローマ美術学校の名誉教授チャザレ・マツカリに師事し、週に一度ほど公使館に迎えて洋画の指導を受けていた。額四隅に彫り表された鍋島家の杏葉紋や、日本・イタリアの国土の彫刻も見どころ。このとき着装した大礼服も現存している。

本図の完成から約二週間後の二月二十六日、直大は、各国の大使・公使、イタリアの大臣ら約三五〇名を日本公使館に招き大舞会を主催した。この日、公使館には第一室にイタリア皇帝・皇后の肖像が掲げられたが、第二室に掲げられ参会者の称賛を受けたのがこの鍋島直大像だった。また別室には大和錦や友禅、扇子や団扇などで飾り立てた一室も設け、直大は日本の伝統工芸をもって賓客を迎えた。このような会場の設えなど、「閣下及び書記官生は始終接待に意を注がれ、甚だ思慮を勞されし故、愛度盛会を終りたるは、廿七日午前四時三十分にはぞありけり」。この日の日本公使館での大舞会の様子は翌日の新聞でも「鍋島公使はじめ…中略…欧羅巴の風習・人情を熟知せられ、接待の厚意を尽くされ」と報じられた（『集書』鍋九一〇一二）。

11 無双の鍋島風

鍋島直正詩・直大書写）一幅 相良頼善筆 明治時代
縦一三六・三 cm 横六〇・四 cm 紙本墨書 掛幅装
公益財団法人鍋島報効会所蔵

鍋島直正は隠居の前年にあたる万延元年（一八六〇）、嫡男直大（このとき直繩）に詩書を書き与えた。それが明治七年（二八七四）の佐賀の乱により焼失したことから、直大は後世に伝えるために同詩を明治十七年夏に書したが、直大筆の書幅も現存していない。現存する本資料は、直大筆の書幅を、のちに旧佐賀藩士の相良頼善が転写したものである。なお「安政己未（安政六年）」とあるのは誤りで、正しくは万延元年で

ある（直正漢詩集「野人亭稿」公益財団法人鍋島報効会所蔵）。大意をとれば、論語・孟子・大学・中庸（四書）と総称される儒教の経書）を学び、剣術・槍術・砲術・馬術といった武術に励み、道徳的な精神を伴う大らかな浩然の気を養えば、他家と並ぶことのない鍋島家独特の気風が醸成される、と解されよう。これを直正は、「武を講じること」に著する所の布襦、猶篋中に在り」として、かつて自らが武術稽古時に着用した衣に直接書き付けて直大に手渡した。なぜなら「甚だ垢汚すと雖も」、この布襦こそ自分の「精神の寓する所だったからである。西洋の文化や技術の先進的な導入で知られる直正だが、直大

の初出府に際して手渡したものは洋書ではなく初代藩主勝茂による藩祖直茂の聞書一冊。課したことは、洋書ではなく質朴な文武両道の修練。示した目指すべき姿とは、いわゆる先進的なもの云々ではなく、「当家の義は諸家に相双ばず格別の風につき、出府の上も古風押し立て候よう」、つまり鍋島家らしい古風さを体得する人格形成の実現だった（出品資料 No. 10）。直大がこれを謹書した明治十七年夏とは、侯爵に叙された夏である（出品資料 No. 9）。長い西洋生活を現地で経験した後もなお、侯爵鍋島直大が「遠つ親」（先祖）と父直正を強く意識し「古風を押し立て」続けていたことをうかがわせる。

余小少講武每所著之布襦猶在篋中雖
甚垢汚而精神之所寓不忍徒棄之乃持
以贈直繩附以七絶情見于辭

修身語孟學庸裏練膽劍槍砲馬中
養將固有浩然氣成就無雙鍋島風

右安政己未六月五日

先考所賜也明治七年罹兵火燼因寫此以傳後十七年夏直大謹書

18 バッスル・ドレス

一着 鍋島栄子所用 明治時代中期

(上衣) 胸囲八八・〇cm 胴囲五八・〇cm 後丈六四・〇cm

(スカート) 胸囲六〇・〇cm 前丈九八・〇cm

後丈一四六・〇cm 裾囲三二六・〇cm

白緋子唐団扇花模様小袖地 公益財団法人鍋島報効会所蔵

鍋島栄子はイタリア渡航前に国内で西洋服の着付けなどを習得し、明治十四年(一八八二)にローマへ入った出品資料No.4「栄子出国前の心得書」に到着後まもない時期の栄子について直大は、「晩餐夜会等多り。日々走るように諸大使公使館へ行きたり。栄子も十分の風習になれたり」とのちに語っている(「復暦本書」)。

直大・栄子夫妻は明治十五年に帰国したが、翌年には東京麹町区に鹿鳴館が落成。わが国における欧米流の生活様式の象徴的な施設として夜会や舞踏会などが開かれた。このとき、十九世紀後半に欧米の上流階級で流行していたスカートの後ろ部分にふくらみのあるスタイルのドレスが、鹿鳴館での催しに参加する日本の上層階級の女性にも普及した。これがバッスル・ドレスである。

本品は鍋島栄子が用いたバッスル・ドレス。上衣やスカートの裾などに垂れ下がる多色絹糸による李・ビーズやタッセル(房)の飾りが華やかだが、地には白紗綾形文の緋子地に、菊・桜・牡丹・唐団扇(軍配)模様を刺繍と絞りで表した江戸時代末期の小袖地が用いられている。小袖一領分の生地ではドレス一着分をまかなえないため、模様がよく見える部分に小袖地を用い、スカートの前と裾の部分にはサテン地を用いている。小袖地をベースとし、またサテン地と組み合わせるといって、他に例を見ない和洋折衷の作例である。

明治四年のイギリス留学前に直大は、和の心で西洋文化を学ぶ「スタンスを」とつ国のひらけし業を敷嶋の 大和心に添て学はむ」と詠み表して以来、約八年間のイギリス生活を経験。帰国直後のこととして「このころ英公使パークス夫人別荘ありて、初めて日本人にて舞踏せしは直大也」と回顧録に記している(「復暦本書」)。そして約二年間のローマでの公使勤務を終えて帰国直後の欧化主義の時期には、鹿鳴館での舞踏会で何度もホスト役を務めるなど「鹿鳴館の華」と謳われた栄子夫人とともにその牽引役として活躍した。



背面



正面



- 1 兜形ボンボニール
- 2 兜形ボンボニール
- 3 入隅箱形壽字ボンボニール
大正14年12月4日 鍋島榮子古稀
および鍋島直映・禎子夫妻銀婚式
- 4 丸容器形ボンボニール 明治25年10月6日
重ね箱形松鶴文ボンボニール 大正4年5月19日
東久邇宮裕彦王・聰子内親王御婚礼
- 6 柳箱形ボンボニール
明治41年4月 竹田宮恒久王・昌子内親王御結婚カ
- 7 六花形菊に勾玉文ボンボニール
昭和10年 北白川永久王・祥子御結婚カ
- 8 八段鏡形鳳凰文ボンボニール
- 9 帙入巻子形唐草文ボンボニール
昭和10年 李鏞・蘭子(松平胖長女)の御結婚カ
- 10 六花形鳳凰文ボンボニール
大正5年11月29日 昭和天皇立太子カ
- 11 文箱形ボンボニール
昭和10年12月 三笠宮崇仁親王御成年
- 12 箱形霞に松文ボンボニール
昭和9年 竹田宮禮子女王・佐野常光御結婚カ
- 13 魚書形ボンボニール
昭和10年 朝香宮正彦王御成年祝い
- 14 戦車形ボンボニール
朝香宮彦彦王御任官
- 15 紋章付槽円形ボンボニール
大正11年 英国ウェールズ公来日の節カ
- 16 墨形船形ボンボニール
- 17 鉄兜形ボンボニール
昭和7年11月22日 朝香宮彦彦王御成年
- 18 丸櫛形七宝菊に龍文ボンボニール
- 19 琵琶形ボンボニール
- 20 六花形七宝梅文ボンボニール
- 21 桃形ボンボニール
- 22 扇形松竹梅文ボンボニール
- 23 金地箱形ボンボニール
- 24 黒漆塗梅枝壽絵箱形ボンボニール
- 25 黒漆塗波に花筏壽絵入隅箱形ボンボニール
- 26 溜塗扇文箱形ボンボニール
鍋島直綱(直大四男)・毛利正子結婚式カ
- 27 朱塗扇文箱形ボンボニール
- 28 黒漆塗若松文箱形ボンボニール
- 29 黒漆塗松梅壽絵箱形ボンボニール 昭和18年
10月13日 久邇宮盛厚王・成子内親王御結婚
- 30 梨子地若松文箱形ボンボニール
昭和14年 久邇宮恭仁子・二条姫基御婚礼
- 31 透漆塗鶴文六角形ボンボニール
- 32 透漆塗松葉に梅花壽絵丸形ボンボニール
- 33 金地松喰鶴壽絵丸形ボンボニール
- 34 丸形ボンボニール 昭和16年10月31日
朝香宮瀧子女王・大給伯爵家へ御降嫁特別午餐会

明治時代以降、皇族や華族では御慶事の宴席出席者に金平糖などを入れた小箱を引出物として添えるようになり、現代もこの伝統は皇室で受け継がれている。この小箱をボンボニールと呼び、意匠の多様さが見どころ。鍋島家には一四六点のボンボニールが伝来しているが、中には書付けなどから由来が分かるものもあり、鍋島家と皇族・華族との御縁の広がりを知ることができる。

38 ボンボニール

三十四点 明治時代・昭和時代
銀製 木製
公益財団法人鍋島報効会所蔵



40 鍋島直映像

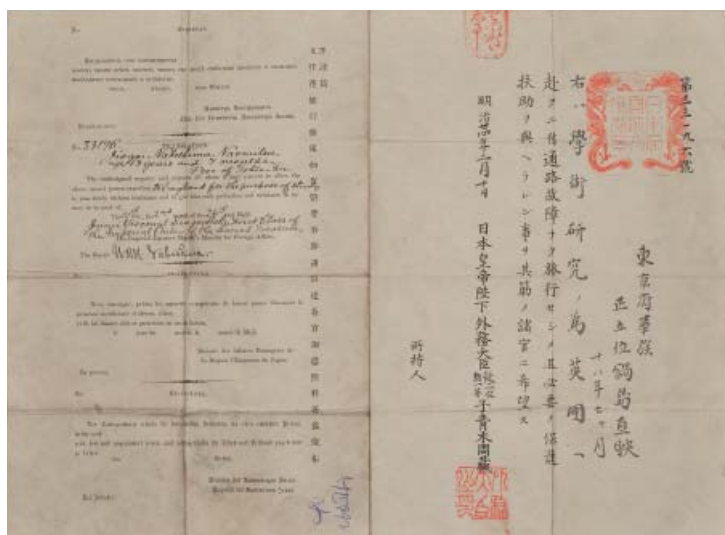
一面 高木背水筆 明治三十二年(一八九九)十月
縦七・八・六cm 横六〇・〇cm 紙本鉛筆 額装
公益財団法人鍋島報効会所蔵

鍋島直映は明治二十四年(一八九二)三月にイギリスへ留学し、同三十一年にケンブリッジ大学を卒業して翌年帰国した。本図は帰国の二カ月後に、卒業時の写真をもとに洋画家高木背水が描いた肖像画。

41 鍋島直映パスポート

一枚 鍋島直映所用 明治二十四年(一八九二)二月十日
縦三・四cm 横四三・〇cm 紙本墨書・印刷・ペン書き
公益財団法人鍋島報効会所蔵

一八歳七ヶ月の鍋島直映が「学術研究ノ為、英国ヘ」赴く際に外務大臣より発行されたパスポート。



謝辞

本展の開催にあたりご協力・ご助言頂きました
左記の関係機関、関係各位に厚く御礼申し上げます。
(敬称略・50音順)

佐賀県立図書館

石橋 道秀

永松 亨

侯爵鍋島家と東京

編集・発行 公益財団法人鍋島報効会

〒八四〇・〇八三一

佐賀市松原二丁目五・二二

TEL. 〇九五二・二二二・四二〇〇

URL <http://www.nabeshima.or.jp>

発行年月日 平成二十八年五月二十三日
印刷 ㈱佐賀印刷社

本書の全部または一部を無断にて転載・複製すること
を禁じます。 © 二〇一六 公益財団法人鍋島報効会



徴古館

The Museum CHOKOKAN

NABESHIMA